移住でも観光でもない、ちょうどいい距離感

二地域居住・関係人口を増やすという選択

二地域居住とは、都市と地方、都市内・地方内などを行き来しながら、暮らしや働き方の幅を広げる新しいライフスタイル。関係人口は、まちに暮らさずとも、その地域と関わる人たちのこと。風通しのいい関係が、清瀬市の景色を少しずつ変えていきます。

緑あふれる清瀬金山緑地公園は、親子でのんびり過ごすのにぴったり。休日には、思い思いの時間を楽しむ家族連れの姿が見られます

住まなくても始まる関係 まちとつながる第一歩

都市と地方、都市内・地方内などの両方に拠点を持ち、行き来しながら暮らす「二地域居住」というライフスタイルが注目されています。清瀬市でもその受け入れに取り組んでおり、まちの魅力に触れるきっかけづくりを進めています。

また、「関係人口」とは、まちに暮らさずとも、その地域の活動に関わり、応援してくれる人たちのこと。無理なく関わるその姿は、新しい風をこのまちに運んでいます。

全国的に人口減少が進む中、清瀬市でも将来的な税収の減少が懸念されており、従来の行政サービスの維持が難しくなることが予想されています。このことから、清瀬市では、定住・移住の促進や観光などによる交流人口の増加だけでなく、二地域居住や関係人口といった多様な関わりを広げる取り組みに力を入れています。こうした〝住まなくても関わる人〟がまちとつながることで、新たな賑わいや将来的な移住の可能性が生まれます。

二地域居住等のイメージ

二地域居住は多様なライフスタイルに応える豊かな暮らし方で、人の流れを生み、地域活性化や関係人口の拡大にもつながります。

訪れたくなる仕組みを全国に広げる挑戦

清瀬市では、まず国土交通省が推進する「二地域居住等官民連携プラットフォーム」に多摩26市で初めて自治体として参加。これは、例えば「田舎に住み、都心で働く」といった多拠点での暮らし方を支援する仕組みで、清瀬市に一時暮らす間に、まちの魅力に触れてもらうことを目指しています。

もうひとつの柱が、ほかの自治体との連携です。例えば長野県坂城町とは「電車でまちおこし」をテーマに交流が続いており、現地イベントへの参加や、10月のきよせ市民まつりでの出店などが行われています。北海道津別町とは、鉄道保存がきっかけでつながり、名物の「クマヤキ」が、きよせ市民まつりに登場予定です。福島県北塩原村とは食育を通じた連携があり、きよせ市民まつりへの出店など、さまざまな形で交流・連携をすることで相互に魅力発信をしています。

きよせファンを育てる関係人口という選択

澁谷市長はこう語ります。「〝選ばれるまち〟を目指して各自治体が努力する中で、限られた人を奪い合うのではなく、新たな発想として、関係人口や交流人口を増やすことでまちの活性化を図りたい。清瀬市の自然や歴史、文化といった魅力に加え、新たな賑わいをつくることで〝きよせファン〟を増やしていきたいと考えています。」

こうした新たな賑わいづくりは特産品の開発や施設整備にも表れています。清瀬市では「きよせ棒」や「清瀬まん」などの特産品開発を進めており、来年2月には南部地域児童館等複合施設が開館予定（P10参照）。園内には鉄道車両「夢空間」を修復して設置するなど、新たな賑わいの拠点づくりが進行中です。

いきなり「住む」のではなく、まずは「関わる」。そんな、無理のないつながりから、清瀬市とのちょうどいい関係が始まります。

ふたつの暮らしを楽しむ 二地域居住等官民連携プラットフォーム

都市と地方、都市内・地方内など2拠点で暮らす「二地域居住等」は、生活拠点としては別の地域と関わりながら、仕事や生活を両立する新しいライフスタイル。国土交通省が官民連携で進めるこの取り組みに、清瀬市も参加しています。移住にハードルを感じる人も、まずは“もうひとつの暮らし”を始めてみませんか？

詳しくはこちら！

つながるまちの輪

清瀬市では、ほかの自治体とゆるやかにつながりながら交流を深めています。代表的な3つのまちをご紹介。

坂城町 長野

しなの鉄道・坂城駅を中心に「電車でまちおこし」を展開。鉄道ファンにも人気の「169系電車」や「坂城駅ナカマルシェ」など、駅を起点とした賑わいづくりに力を入れています。

津別町 北海道

廃線となった旧ふるさと銀河線の駅舎や転車台など、鉄道遺産をまちのシンボルとして大切に残す津別町。「クマヤキ」をはじめとするユニークな地域発スイーツでも知られています。

北塩原村 福島

磐梯山のふもと、自然豊かな北塩原村では、地元食材を活かした「食育推進」に力を入れています。学校や地域での食育活動を通じて、子どもから大人まで食の大切さを学ぶ取り組みを展開。